

# KCELS

## Newsletter No.3 MARCH 1988

### KCELS第12回大会

泥谷 征人

神戸女学院大学英文学会は今年で12回目の大会を迎えることができた。感謝である。発足以来、この学会のために様々な形で御尽力下さり、ここまで学会を支えてきて下さった多くの方々に心からお礼を申しあげたい。

12はひとつの周期が終わり、ことが成就・完成されたことを意味する数字である。しかし、KCELSにとって終わりはない。ひとつの小さな時の節目が刻みこまれたにすぎない。これまでの歩みのなかでKCELSが残してきた足跡に自己満足するのではなく、今まで以上に活気と刺激に富んだ知的交わりの場にしてゆく努力をしてゆかなくてはならない。年一回という単発的な集りで終らせるのではなく、みんなが心待ちにし、積極的に、喜んで参加できる、またそうするに値する学会にしてゆきたいと願っている。

これからの学会のあり方、また将来計画等について、会員の皆様から御意見をお聞かせ願えれば幸いである。

### KCELS第12回大会報告 (1987年11月6日(金))

#### ●特別講演(要旨)

#### 「子どものことばと詩のことば」

東京大学教授

池上 嘉彦 氏

子どもが何の気なしに言ったことばがとても詩的に聞こえる——誰もそのような経験をしたことがあるはずである。どうしてそのようなことが起こるのだろうか。ごく普通の説明だと、子どもは純真であり、その純真さがことば遣いにも自然に現れてくるから、ということになる。しかし、この問いには少し違った視点から、つまり、私たちが日頃慣れ親しんでいるがために、まったく当たりまえのことと思いついてしまっている「ことば」というものの本質をあらためて考え直してみることによって、答えることができるはずである。

平均的な大人にとっては、「ことば」とは何よりもまず「伝達的手段」である。つまり、心の中であって、そ



のままでは触れることも、見ることもできない考えや想いに姿を与え、表に現わし、他人にもそれが捉えられ、伝わるようにするためのもの、というわけである。

この考え方は、もちろん間違っているわけではない。それどころか、社会を構成して生活する人間にとって、「ことば」というものに対して与えられている大切な機能は、まさにそういうことである。しかし、忘れてはならないこと——しかし、それでいて、私たちが気づかないで過ごしてしまいがちなこと——は、「ことば」はそれ以上のものであるということである。

ことばが「(伝達の)手段」である限りは、ことばは究極的に重要なものということにはならない。重要なのは、ことばを「手段」として伝えられる内容や事柄ということになる。ことばは、第二次的なものとなる。

このような考え方の背後にあるのは、私たちは心の中にまずすでに整理された内容や事柄を持ち、それからそれらに合うことばを選ぶという発想である。もし本当にそうであるなら、ことばは確かに第二次的なものということになる。

しかし、ことばについての私たちの経験を少し注意深く思い返してみると、ちょうどそれとは正反対のことが起こることもあるのに気づくはずである。つまり、内容や事柄が先あって、それをことばが「表わす」というのではなく、むしろ、ことばが先行して新しい内容や事柄を「創り出す」という状況である。例えば、「ことば遊び」がそうである。日頃はまったく他人顔で近づくことのないようなことばどうしが、ぶつかり合う——そうすると、そこから思いがけない新しい意味が生まれ、その新しい意味を通して私たちがそれまでは接したことのないよう

なものに接するという経験をする。ことばが新しい世界を創り出す。日常のことばの違いがことばのすべてではなくて、ことばには日常の世界を超えた新しい世界を創造する力が、まだいくらでも潜んでいて、私たちの方その気にさえなれば、いくらでもそのような世界を啓示してくれるのである。

そこでは、ことばは何かの「手段」などといったものでなく、新しい経験を生み出す主体となる。詩はことばに潜む新しい世界を創り出す力が自らを現わす場である。そこでは、ことばそのものが価値あるものとして私たちの前に姿を現わす。

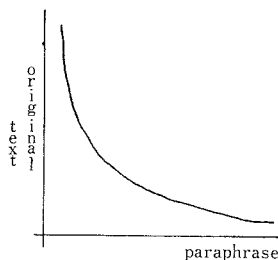
誰も幼い頃の自らのことばについての経験を想起してみれば、ことばが自分の意志を伝えたり、気持を表わしたりする手段として働くということを認識した時の驚きと並んで、そのようなふしぎな力を持つことばそのものをしげしげと眺め、眺めれば眺めるほど、ことばそのものがいかにもふしぎな対象に思え、手に取って愛でてみたいというような気持を抱いたことがあるであろう。子どもにとっては、ことばそのものがまだ本当に盡きない興味をひきつけてくれる対象である。そしてまた、子どもは大人のように社会的に定められ、新鮮さを失って実用性が優先することばの違いに慣らされてしまう前の段階に位置する。意図してであろうと、意図せずしてであろうと、ことばとの「戯れ」をする余地—そこから、子どものことばには、詩のことばの本質に見られるような、新しい世界を創り出すことばの働きが生まれてくるわけである。

## ●研究発表(要旨)

### “An Approach to Reported Discourse in English and Japanese”

大月 みゆき

今回の発表では、言語の自然な表現形式の一つである「<sup>Reported Discourse</sup>話法」を日英両言語からとり上げ、その本質及び文化との関連を考察した。従来の研究の多くは直接話法と間接話法に分け、各話法の特徴や相互関係を明確にする論議であった。この見方には根本的な不備があるように思われる。話法が別の次元の場(過去や想像上など)の行為や出来事、思想・感情の表現であるとすれば、直接話法といえども「正確な再現」は不可能である。心理的にみても、自然言語の実際を考えても、話者による何らかの修正を受けているはずである。間



接話法においては、「元になるもの」に比較的近いものから、話者による修正を多く受けているものまで無限に存在する。その極限のもう一方が、概念化による paraphrase である。縦軸にも横軸にも無限に近づくが、決して交わらない。original text は厳密に言えば復元不可能であるし、paraphrase になれば話法の域を出る。話法は original text と paraphrase を結ぶ連続体と考えられる。スペクトルのようなもので、赤と紫の間の色の漸次的変化はわかるが、区分は明確でない。話者の心中では現在の発話の場と次元を異にする場が映像化<sup>envision</sup>されており、話者はその映像を忠実に再現したり、要約したり、説明を加えたり、解釈を施したりする。その発現が話法であると考え、「<sup>Hypothesis of Envisinning</sup>映像化の仮説」と「<sup>Hypothesis of Indistinguishability</sup>連続性の仮説」を提示したい。話法の本質は英語・日本語に共通のものである。話法の明確な分類が本来可能であること、発現形態が言語により異なること、それが民族性や文化との関わりを持つことから、話法の新しいとらえ方が期待される。日本語話法に対して英語からの類推的な解釈・価値判断は避けたい。人間の言語には普遍的な要素も多いようで、対照研究でも言語間の相違だけでなく、そういった普遍性に関する考察が推進されるべきである。言語は文化の反映であるその文化における思考を規定するものである。

## 「Bleak House—Chancery World をめぐる男性たち」

船橋 麻由美

作品 *Bleak House* は、London の霧の描写で始まる。霧で象徴されているこの閉ざされた世界の中心は Chancery (大法官裁判所) である。

この Chancery で活動している訴訟の当事者や弁護士などは、それぞれが Chancery の世界の支配、影響を受けている。

訴訟の犠牲となった Richard は、最初は前途ある若者であった。しかし Jarndyce and Jarndyce 訴訟に「吸い寄せられ」、のめり込む。そして定職につき、地道に努力することができず「期待」するだけの人生を送ることになる。Chancery は、Richard のように一旦巻き込まれた人間を訴訟以外のことには無力にしてしまうのである。Chancery の世界が歪んでいることは、弁護士の姿にも表われている。彼らは弱者のために存在し、正義が行われるのを助ける立場にありながら、実際は弱者を虐げているのである。例えば Richard の弁護士 Vholes は、彼自身は根っからの悪人とはいえ父や娘たちの為に働

いているのだが、Chanceryの世界の内では彼はRichardにつきまとう「不吉な影」であり、Richardを破滅へと追いやるのである。

このように関わりのある人間に歪みを生み出すChanceryの世界で、自分を見失うことなく生きていくにはJohn JarndyceのようにChanceryそのものからできるだけ遠ざかっていなければならない。当事者の彼が、訴訟から逃れるようにして生きていかなければならないという皮肉な結果になっているのである。

*Bleak House* に登場する人びとは、自分の意志とは無関係にChanceryの世界に足を踏み入れている。正義のための法が人を不幸にする矛盾に満ちたChanceryの世界では、彼らは通常の価値観では生きていけない。

Chanceryの外にあっては、希望に満ち善良であっても、ひと度そこに関わりを持つとそれまでの生き方は通用しないのである。

たとえ訴訟が解決されても、心の平安と幸福は望めない。Chanceryの世界は破壊はするが創造はしないからである。そして法の世界に直接関わっているのが男性たちであるというのは興味深い。Chanceryに関わる男性たちは、一見非常に多忙ではなばない活動をしているように思われる。しかし従来の強い男性のイメージは見出すことができない。歪んだChanceryの世界に身を置くことは、自らを歪めることに他ならないからである。

*Bleak House* では、Chanceryの中心近くにいる人物は身を減らし、そこから離れば離れるほど平和に生活ができるという皮肉なパターンが出来上がっているのである。社会で活動しているはずの男性たちが、Chanceryの矛盾に満ちた世界で蝕まれている一方、中心から追いやられている本来ならば受身であるとされる女性たちが、男をしのぐたくましさで生きているのである。

*Bleak House* では、閉ざされたChanceryの世界が、従来の男女の描かれ方の逆転を生み出しているのである。

## キャンパス・ニュース

### ◎日本シェイクスピア学会

昨秋10月9日、10日の両日、本学院において、第26回日本シェイクスピア学会が開催された。初日は講堂における小津次郎会長の開会のことば、岡本道雄院長の挨拶の後、引き続いてデフォレスト記念館において、計9名の研究発表がなされた。第2日は講堂で、午前はパネル・ディスカッション、午後は2名の講演があった。

本学がホスト役をつとめた学会としては、20年あまり前に開かれた日本英文学会大会に次ぐ全国規模の大きな

学会であった。開催校としての責任を果たす自信がなかったので何年も辞退していたのであるが、昨年は引き受けざるを得なくなっていた。快く協力してくださった学院、英文学科、学生諸君に対してこころから感謝したい。「シェイクスピア園」も学会開催の2日前に開園にまでこぎつけ、披露することができた。来学した300余名の研究者のなかに、神戸女学院を学問、花、緑と連想するようになって岡田山の坂道を下りられた方々があれば望外の幸いである。(金城盛紀)

◎1987年4月より米国Michigan州立大学から来学、それぞれ交換教授、客員教授として教鞭をとられていたMr. and Mrs. Davidsonが1988年3月離日、本務校に帰られました。

### 会員による新出版ご紹介

#### ・本城智子・上紀子両氏

『例解現代英文法辞典』(安井稔編) 1987年5月  
大修館書店 6,800円

#### ・別府恵子氏

*Leon Edel and Literary Art* (ed. Lyall H. Powers)  
1988年 University Microfilm International Research Press

### 会員消息

#### ・高瀬ふみ子氏 (神戸女学院大学教授)

米国Arizona州立大学で開催されたSixteenth Century Studies学会(1987年10月29日～31日)にて研究発表を行われました。

#### ・別府恵子氏 (神戸女学院大学教授)

イタリアBellagioで開催されたAmerican Literature in Multinational Perspective学会(1987年11月29日～12月5日)にて研究発表を行われました。

#### ・C.V.Broderick氏 (神戸女学院大学教授)

1987年4月より1988年3月まで米国Michigan州立大学で交換教授として教鞭をとられ、4月より一年間、同大学英文学科でVisiting research scholarとして研究に従事されます。

#### ・M.Bethe氏 (神戸女学院大学助教授)

1987年前期末をもって一身上の都合により退職されました。

#### ・平井雅子氏 (神戸女学院大学助教授)

英国Cambridge大学での一年半の研究を終えられ、1988年4月帰校されます。

- B.L.Cooney 氏 (神戸女学院大学専任講師)  
1987年4月赴任されました。
- 中村真由美氏 (E99)  
1988年4月よりプール学院短期大学に専任講師として  
就任されます。

## 会 則

### (1) 名 称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

### (2) 目 的

本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

### (3) 構 成

本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

### (4) 会 費

正会員は年会費を納入する。

### (5) 活 動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletter を発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

## お知らせとお願い

神戸女学院大学英文学会の郵便振替口座が設置されていますので、年会費の納入にご利用ください。

番号 神戸0—9323

名称 神戸女学院大学英文学会

なお、新入会を随時、受付中ですが、入会金は不用です。より多くの卒業生の皆様が入会され、研究活動の発展と交流の促進をしていきたいと願っております。

## 編 集 後 記

会員の皆様にはお元気でご活躍のことと存じ上げます。ようやく KCELS Newsletters 第3号をお届けできる運びとなりました。第12回年次大会の様、会員諸氏のご活躍、及びキャンパスの現況をご報告いたします。ご多忙にもかかわらず快く講演要旨をお寄せ下さった池上嘉彦先生をはじめ、ご寄稿頂きました皆様に紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

本年度の委員一同、会員のネットワークをより強固にするべくいろいろな案を考えましたが、時間切れで結局実行出来ずに終わりました。バトンタッチする来年度の委員の方々に引き続き検討をお願いするとともに、会員の皆様からも一層のご支援、ご助言を頂けますようお願いいたします。

### KCELS Newsletter 編集委員

(第12回 KCELS 準備委員)

- 馬場美奈子    • 泥谷 征人    • 伊藤 栄子
- C. Seton      • 上 紀子 (A B C 順)
- 写真撮影 林 和仁

## KCELS Newsletter No. 3

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4—1

Tel (0798) 52-0955

振替口座番号 神戸 0-9323